



図 2 本回路の計数率 (数え落とし) 特性

不感時間補正は  $n = Ne^{-Nt}$  (文献 4) により行なった。  $n$  は観測されたカウント数,  $N$  は「真の」カウント数,  $t$  は不感時間係数で ND フィルター法により求めた値は 30.5 nsec になった。望遠鏡は口径 20 cm, フォトマルは R647-04 に -1100 V を印加し, B フィルターを使用した。

4. おわりに

この回路を組み込んだ測光器を用いて, 主に変光星や

お知らせ

第 4 回小惑星会議のご案内

日 時: 1988 年 6 月 25 日 ~ 26 日  
 日 程: 25 日 13 時 ~ 17 時 仙台市天文台講義室  
 18 時 ~ 21 時 良陵会館 (ごんりょうか  
 いかん) にて懇親会  
 26 日 9 時 ~ 15 時 仙台市天文台講義室  
 会 費: 参加費 2,000 円 (26 日の昼食代を含む)  
 懇親会費 6,000 円  
 宿泊所は当方にて紹介いたします。  
 (出欠・宿泊の有無等はハガキにてお知らせ下  
 さい)  
 連絡先: 〒980 仙台市桜ヶ岡公園 1-1  
 仙台市天文台  
 小石川 正弘  
 TEL. 022 (222) 6694

尚, 懇親会会場の良陵会館の住所と電話番号は次の通  
 りです。

仙台市広瀬町 3  
 良陵会館  
 TEL. 022 (227) 2721

ハレー彗星の写真についてのお願い

1985~86 年のハレー彗星の帰帰に際して組織された  
 International Halley Watch (IHW, 国際ハレー彗星観  
 測計画) において, 目下ハレー彗星の写真集を編纂する

掩蔽の観測を行なっている。その一部は文献 5 に発表し  
 た。また, 間瀬康文氏 (名古屋市) は, 本回路を用い  
 CPU を内蔵し測光データ取得・測光器制御を RS-232C  
 により手持ちのパソコンで行なえるコンパクトな測光器  
 を開発し, 試験観測を行なっている。(文献 3 および 6)

なお, 本研究を行なうにあたり, 北村正利 (東京天文  
 台)・田中 済 (東京大学) 両先生および清水 実副所長  
 はじめ岡山天体物理観測所の職員の方々の親切な御指導  
 を受けたことに感謝致します。

参 考 文 献

1. 浜松ホトニクス (1981), フォトンカウンティングユニット・  
 テクニカルデータシート No. CE-077-01
2. 田中 済, 「天文と気象」連載, 1980 年 4 月号 ~ 1982 年 4  
 月号
3. 大島 修, 間瀬康文 (1987), 天文学に関する技術シンポジ  
 ュウム 1987 集録, p. 123
4. Henden, A. and Kaitchuck, R. (1982), Astronomical  
 Photometry, Van Nostrand Reinhold, p. 81
5. O. Ohshima (1988), I.B.V.S., No. 3135
6. 大島 修, 間瀬康文 (1987), 第 1 回天文教育研究会集録,  
 p. 193

計画があり, 写真の提供を観測者をお願いしています。  
 今回のハレー彗星の動向, 振舞いをとりまとめて, 後世  
 に残し, 彗星天文学の発展に寄与しようという IHW 計  
 画の一環で, 彗星の大規模現象の研究に関して貴重な基  
 礎データとなるものです。

最近, この写真集の編集に関係している J. C. ブラン  
 ト博士から, “優秀な多数の観測を実施している日本の  
 アマチュア天文家の参加が極めて少ないのが残念であ  
 る” との連絡がありました。東に太平洋をひかえた日本  
 からの観測は連続写真を完成する上で貴重なものです。  
 アマチュアの撮影した広角写真が非常に役に立つこと  
 は疑いありません。個人で直接に送附することも可能で  
 すが, 第 18 回彗星会議 (1988 年 3 月 20~21 日, 宇都  
 宮市) で写真発送などのお手伝いをする世話人を決めま  
 した。

写真提供にご協力いただける方は下記要領にて写真を  
 世話人までお送り下さい。(厚紙をあてて折れない様ご  
 注意下さい。) (彗星会議)

写真サイズ: 6 ツ切 ~ 4 ツ切以下 (カラー, モノクロ  
 を問わない)

撮影データ: 「IHW アマチュア観測マニュアル日  
 本語版」のフォーマットに従って記入  
 (記入について不明な点は世話人まで)。

締 切: 1988 年 6 月末日

送 附 先: (世話人)

〒158 東京都世田谷区用賀 4-11-20-501  
 富田弘一郎

### 宇宙科学研究所教官公募

公募人員：助教 1 名

所属部門：宇宙圏研究系：赤外線天体物理学部門

専門分野：飛翔体を用いた、赤外線の観測による天体物理学の研究、及び飛翔体搭載用観測器の開発研究において指導的な役割を担当する。

同研究系には、現在、高エネルギー天体物理学第 1、第 2、第 3 の各部門及び赤外線天体物理学部門があります。

当該分野の科学衛星計画及び共同利用の為の事業を分担し、その遂行に積極的な役割を果たす方を希望します。

尚、当部門の教授には奥田治之が在籍しています。

着任時期：決定後、昭和 63 年度内のなるべく早い時期。

提出書類：(1) 略歴、(2) 研究歴、(3) 論文リスト及び主要論文別刷、(4) 研究計画書（自薦の場合のみ）、(5) 推薦書 2 通（他薦の場合）。又は本人について意見を述べられる人 2 名の氏名と連絡先（自薦の場合）。

公募締切：昭和 63 年 8 月 15 日 必着

宛 先：〒229 神奈川県相模原市由野台 3-1-1

宇宙科学研究所 相模原キャンパス

所長 西村 純

電話 0427-51-3911（代表）

問い合わせ、及び資料の請求は下記へ願います。

宇宙圏研究系主幹 田中靖郎

その他：選考は宇宙科学研究所運営協議員会議において行います。応募者に適任者がいない場合には、決定を保留することがあります。

封筒の表に「助教公募（または推薦）書類在中」と朱で明記してください。

### 新刊紹介

#### 日本アマチュア天文学史

日本アマチュア天文学史編纂会編

（恒星社厚生閣発行、B5判、400頁、4800円）

日本天文学会はその発起人会を明治 41 年（1908 年）1 月 19 日に東京天文台で開き、その時の出席者は 18 名で、寺尾寿台長を座長とし一戸直藏、井上四郎、岡田武松、早乙女清房、田中館愛橋、平山清次、平山信などの諸氏で、第一線の天文学者の名前が連らねられている。この内の井上四郎氏はアマチュア出身の東京天文台職員

であった。そして、この時、本会の目的及び事業が定められた。定款第 4 条に「本会は、天文学の進歩及び普及することをもって目的とする」と明記してある。

近代天文学が他の学問と異なる点は、多くのアマチュア天文家と共に歩んで来た、ということではなかろうか。現職の天文学者の中、約半数がその前歴にアマチュア時代を持つことによっても、うなづけることと思う。

さて、このような背景をもとに、表記のような書物が、多くの編纂委員及び恒星社厚生閣の努力の結晶として発行された。本書は総説と各論から成り、その時代区分は一応明治以前のいわゆる夜明け前の黎明期から、宇宙への飛躍の第一歩となった人工衛星の打ち上げ直後までとなっている。

総説は、活動の推移が適切な時代区分と共に明快に語られている。

各論は、アマチュア活動の各分野において、現在指導的な立場にある諸氏により、太陽黒点、惑星、日・月食、水・金星日面経過、掩蔽（星食）、流星、流星塵、隕石、彗星、黄道光、変光星・新星、人工衛星、天文計算、天体写真、望遠鏡一鏡面研磨を主として、天文同好会一学校天文部、出版物、天文学史、天文民俗学と続けられている。

1981 年 2 月 8 日に第 1 回の編集会議が開かれてより、約 8 年の年月を要して発行された本書は、執筆により文章にも対応の態度にも差があることは当然としても、登場する方達のアマチュアとしての天文学への執着と共に発行への執念を感じる。この 8 年の間に、20 名の編集委員の中には故人となられた方もある。

したがって、まだまだ多くの歴史的資料が日の目を見ることを望みながら眠っていることであろう。巻末に掲載された人名索引は、日本の近代天文学を築き、現代の天文学を支えている人達のいかに多いかを示すと共に、それぞれの方々の足跡でもであろう。しかし、本書は出版されるべき時期に、出版されるべくして出版された書物というべきであろう。いづれにしても、記録されていなくてはならない内容と、出版されなくてはならない書物が、多くの方々の長い努力の末に、やっと出版され、日の目を見ることになった、という思いを深く持つ書物である。（香西洋樹）

☆ ☆

☆ ☆ ☆